

第7話 東宝青春映画の終焉

■孤軍奮闘の東宝

内藤洋子や酒井和歌子が青春アイドル女優の座を去った頃、日本映画界全体にも大きな変化が訪れていた。

共に経営が行き詰まっていた日活と大映は、70年5月に「ダイニチ映配」を設立し、共同配給を行うことによって合理化を図らざるを得なくなっていた。鹿児島日活が日活、大映高島が大映の映画を上映していた鹿児島の繁華街天文館でも、鹿児島日活が閉館し、大映高島がダイニチ封切館として日活と大映の映画を上映することになった。

日活の凋落に伴い、吉永小百合に代表される青春アイドルスターたちは次々と去っていく。吉永主演の日活青春映画は69年1月公開の『花ひらく娘たち』（69 斉藤武市）が最後となった。この映画の原作は石坂洋次郎「金の糸銀の糸」。『花と娘と白い道』（61 森永健次郎）以来8年間に15本を数え日活青春映画の王座を占めていた吉永主演・石坂原作のコンビは、これが最後となる。

吉永は、70年の日活最後になるお正月映画、石原裕次郎以下オールスターキャストの『嵐の勇者たち』（69 舛田利雄）に顔見せしたのを最後に日活を去る。同時に、『若い人』（37 豊田四郎）以来30年以上にわたり日活だけでなく東映を除くあらゆる映画会社に青春映画の原作を提供し、その数80本に及ぶ石坂洋次郎作品も、過去の大ヒット作のリメイクを除けば次の舟木一夫主演『青春の鐘』（69 鍛冶昇）が最後となる。

浜田光夫、渡哲也、松原智恵子、和泉雅子といった他の青春スターたちも、日活の製作方針転換により、アクション、やくざ、お色気といった畑違いの路線の映画に出演するようになっていく。従来の日活青春映画は、吉永小百合の退場とともに完全に終焉を迎えたと言っている。

また、70年のヒット作は松竹が『男はつらいよ』やコント55号、ドリフターズ主演作の喜劇路線、東宝が『軍閥』『新撰組』『待ち伏せ』『幕末』の戦争映画や時代劇、東映がやくざ路線、大映が『座頭市』『悪名』のシリーズもの、日活は『戦争と人間』『富士山頂』『嵐の勇者たち』の大作路線と、青春映画の出る幕は最早なかった。『若大将』シリーズの興行的低落傾向が典型だった。

そんな中、ほぼそれまでのペースで青春映画を作り続けたのは東宝だけである。酒井和歌子の後継に期待した吉沢京子は、子役出身でテレビドラマ「柔道一直線」のヒロインとして人気を集めていた。彼女主演でシリーズ化を狙った『バツグン女子高校生 十六才は感じちゃう』『同 そっとしといて十六才』（いずれも70 松森健）は古臭い構造の平凡な学園物語に終わり、わずか2作で打ち止めとなる。

『若大将対青大将』ではシリーズを受け継ぐ予定の大矢茂の恋人役に起用され、三代目ヒロインと目されたが、大矢『若大将』自体がそれっきりになり彼女の活躍の場は結局定着しなかった。『父ちゃんのポーが聞こえる』(71 石田勝心) という少女闘病記の傑作はあるものの、青春映画では見込んだほどの成果をあげることなくテレビへ戻っていく。

■「リア充」ゆえの悩み——『赤頭巾ちゃん気をつけて』

一方で、東宝映画の総体は若い才気ある監督たちの出現で活気を帯び始めていた。この時期、前出の出目昌伸、浅野正雄、小谷承靖のほか、『死ぬにはまだ早い』69、『白昼の襲撃』70、『豹（ジャガー）は走った』70 とデビューから3作続けて新感覚のアクション映画で評判を取った西村潔、『野獣の復活』69 でデビューした山本迪夫が登場し、森谷司郎の『弾痕』69 などと併せ「東宝ニューアクション」とか「東宝ニューウェーブ」とかの呼称を得て注目される。そこには、それまでの東宝映画に乏しかった「時代の勢い」とでもいったものが漂い、同時期に注目された「日活ニューアクション」ほど鮮烈にはではないにせよ、同時代を生きるわたしたち若い観客を刺激した。

中でも、内藤洋子、酒井和歌子の青春映画でも加山雄三のアクション映画でも斬新な映画作りに挑んでいた森谷司郎は、これら若手監督たちの旗手とでもいった立場にあった。その森谷が東宝青春映画に新風を吹き込んだのが、『赤頭巾ちゃん気をつけて』(70 森谷司郎 脚・井手俊郎+森谷司郎 原・庄司薫) である。160 万部突破のベストセラーとなった69 年上半期芥川賞受賞作品を受賞1 年後に映画化公開するスピードは、石原慎太郎の同賞受賞作を映画化した『太陽の季節』に次ぐ時事性、話題性だった。

広く読まれた小説だけにキャスティングが注目の的だったが、主人公・薫にドラマ出演が一度あるだけの現役慶大生・岡田裕介(現・東映会長)、そのガールフレンド由美には演技歴のない19 歳のファッションモデル森和代が抜擢された。他にも薫の友人・小林など周囲の若者は全員新人を起用し、既成の俳優をほとんど使っていない。自主映画の高校生監督として注目されていた原将孝(現・将人) など素人の起用もある。

そのことにより、また銀座や有楽町など都内各所で臨場感あるロケ撮影を重ねたことにより、一種ドキュメンタリー映画のようなリアルな空気が醸し出されていた。数寄屋橋交差点あたりを歩く主人公の向こうを大規模なデモ隊が横切っていく場面など、物語設定である69 年2 月9 日という一日からわずか1 年ほど後の、さほど変わっていない時代の色が画面にありありと現れているように感じられるのだった。

薫は東大受験が中止になり、曖昧な立場にいる高校3 年生だ。とりあえずこの年の大学受験を見送り、これからの自分の生き方について改めてじっくり考え直そうとしている。彼は自分なりに世の中のために何かをしなくてはならないとの意識を持ってマイペースで学んでいこうとしているのだが、その半面、ちっぽけな自分に何ができるだろうかとの不安感に襲われたりもする。

自分が、威勢よく学生運動に打ち込む同世代と比べ「お行儀がいいだけがとりえの全くつまらない若者なのかもしれない」との思いを抱えている。それは、学生運動が盛んだったあの時代、運動に加わっていない若者なら誰しも感じてしまいがちな悩みだった。訪ねてきた友人の小林（富川徹夫）もやはり彼なりに悩んでいて、胸にひっかかっているものを吐露する。

朝に由美との電話のささいな言葉の行き違いで喧嘩してしまったさえない一日は、周囲のさまざまな大人とのやりとりや小林の来訪で過ぎていき、屈託の晴れない薫は夕方の銀座の街を一人さまよう。街頭にあふれかえる人々を見るにつけ、広くて大きな世の中とまだ無力でしかない自分とを対比してしまう。

そのとき、激痛が走った。2、3日前に生爪を剥がす怪我を負った足を、幼い女の子に偶然踏まれてしまったのだ。薫は、一生懸命謝ってくれるこの子と話すうちに仲良しになった。彼女が探している「あかずきんちゃん」の絵本を本屋までついて行って選んでやる。別れ際、「気をつけて！」と声を掛けた薫に、女の子は「あなたも気をつけて」と応えたように聞こえた…。

このささいな出会いで、薫はなんだか人間すべてを好きになれそうな気がしてくる。不安が解消されたわけではないが、悩んでいるよりもとりあえずやさしい気持で世の中と接していくという目標を掴む。学生運動の叫ぶ革命はでなく、社会の枠組みの範囲でできる限りよりよい状況の実現に努力する。その手段として、当面自己の力を蓄えていこうと決心する。

そんな昂揚した気持になったまま、由美を呼び出して仲直りし、車のヘッドライトに照らされた夜の舗道を歩く。今日一日の出来事を言葉少なに伝え、そっと手をつなぐ。雪がちらつく中、「赤頭巾ちゃん気をつけて もう日が暮れる」というリフレインが印象的な主題歌（歌・佐良直美）が流れ始める。そして歌とともに画面には、ベトナム戦争反対デモやサイケデリックなファッションなど薫たちを取り巻く世相が平凡パンチその他で売り出していたまだ27歳の加納典明によるスチール写真で示されるうち、映画は幕を閉じる。

薫は、飢えも貧しさも知らないわれわれ当時の若者のうちでも、またひととき恵まれた境遇にある。東京の立派な家庭に育ち、苦勞せずに東大に入れそうな学力を持つ少年だ。かわいいガールフレンドもいるし、理解ある家族に囲まれてもいる。薫だけではない。由美や小林にしても、高校生一般が直面していたような受験や周囲の大人との軋轢等々の形而下的悩みとはほとんど縁のないところにいる。

今風に言えば「リア充」だ。田舎で親や教師から受験の重圧をかけられ女性とは全く縁のない高校生活を送っていたわたしからすれば、羨望どころか怨嗟の対象になったとしてもおかしくない。しかし高校2年で原作小説を読み、3年のときこの映画に接したわたしは、薫や小林の悩みが身に迫って感じられ、公開後数日の間に立て続けに5回観た。彼らにすっかり同化し、共感したのである。

なぜなら、薫も小林も実生活で「リア充」であったとしても、自分はどうか生きてらいいのかという内省的な問いだけは常に持ち続けているからだ。彼らにとっても、この問いかけの重みは大きい。うちひしがれそうになるくらい真剣に考え込んでいる。小林が薫に向かって息巻きながら感情激して涙ぐんでくる気持、薫がそっと由美の手を握る気持、いずれも痛切なものだ。羨望には当たらない。

小説が大ベストセラーになっただけでなく、この映画も興行的にヒットしたのは、わたしだけでなく多くの若者の共感があったからだろう。それは、この時代を生きる高校生や大学生の誰もが大人になり小なり抱く感覚だったのではないか。大人たちが作ってきた戦後の高度経済成長をもたらした秩序を変えなければならない。だが、学生運動も東大入試を中止させた安田講堂の攻防で一段落した感のあった69年から70年、そうした運動も結局は無力であることを覚り始めていた者は、じゃあどうしたらいい、との自問を抱えていたのである。

事実、演じた岡田裕介自身が後年次のように述懐している。

本屋の前で女の子と別れた後、薫のアップがあるのだが、そこで森谷監督から「清々しい顔をしてくれ」と指示されたのに対し、「監督、それは僕らの心情をわかってないですよ」と意見したのだという。「僕らがどれだけつらい思いを抱えて生きているか…むしろそこは泣きたいくらいの心情だ」と。(「東宝青春映画のきらめき」2012年キネマ旬報社・刊 所収インタビューより)

それは偽らざる気持だったのだろう。そして森谷はそれを受け入れ、「好きにやれ」と言ったそうである。ドキュメンタリーのように、街の情景だけでなく人物の心情まで、実際の姿や感情を重視したわけだ。これが、映画『赤頭巾ちゃん気をつけて』成功の秘密であり、その後の森谷青春映画の魅力にもなっていく。

岡田は当時東映京都撮影所長で後に東映社長、会長になる大プロデューサー岡田茂の長男であり、薫と同じ都立日比谷高校を卒業し、一浪後の受験で東大入試中止の煽りを持った経験を持つ。初めての映画出演ながら、内省的な主人公像を穏やかに、かといって若年寄にはならないよう程良く演じてみせた。後年プロデューサーに転じ、東映社長を務めることになる彼は、『赤頭巾ちゃん気をつけて』の成功により、その後も似たような役柄で東宝青春映画に主演していく。

■やさしさゆえの残酷さ——『初めての旅』

ただ、『赤頭巾ちゃん』の薫の姿勢には、柔軟な反面、優柔な部分があった。やさしさの裏にはひよわさがついてまわる。そのひよわさゆえに他人を傷つけてしまうことがあり、思わぬ悲劇を生んでしまいかねない危険性が常に伴っていた。そこまでいかない場合でも、恵まれた立場にいる者のいい気なひとりよがりになるおそれがある。

次の主演作『初めての旅』(71 森谷司郎 脚・井手俊郎 原・曾野綾子)の主人公・純

一も、東京の山の手家庭に育った極めて恵まれた少年である。優秀な兄や姉と同じコースに乗るよう期待する両親に反発し、自分の生き方を考え直してみるために家出した。神宮外苑で同じくアテもなくぶらぶらしている少年・勝（高橋長英）と出会い、近づきになった二人は路上駐車してあったスポーツカーに勝手に乗り込んで一緒に旅立つ。

勝は、純一とは大違いのごみごみした下町の育ちで、貧しい家、ぐうたらな父、浮気な母……という環境にいる工員だ。小さな町工場でのくすんだ単調な日々嫌気がさして飛び出してきたところだった。

浜辺で遊んだり立ち寄ったドライブインでドサ回りの歌手一行の人間模様に触れたりしながら二人の旅は進む。最初は行方定めぬ旅が、途中から純一の伯父の牧場をめざすことにする。伯父は、名門一族では異色の存在で、いまだに独身を通し牛を飼って生活している。世間に背を向け自分らしい毅然とした人生を送る伯父の姿を目の当たりにして、純一は自身の甘えた気持を恥じ、車を盗んだことを告白した。

警察で尋問を受け、純一の父が法務省の高級官僚である素姓がわかると勝だけに罪が押しつけられた。純一は自分も同罪だと主張するものの、二人は引き離される。ラストシーン、係官に懸命に抗議する純一に向かい、勝は「いいんだ」と言うかのようにほほえんでみせる。

全編にわたり、小椋佳の曲が流れる。「僕は呼びかけはしない 遠くすぎ去るものに…」で始まる「さらば青春」をはじめ、デビュー曲「しおさいの詩」、第2弾「六月の雨」などまるで音楽映画の趣だ。デビューシングル発売前で、映画公開と同時に発売された物語と歌によるアルバム「青春～砂漠の少年」があるだけの無名歌手を、岡田裕介と森和代がジャケットモデルと物語部分のナレーションを担当した縁で知った森谷司郎監督は大胆にも大きく前面に出した。後に名高い歌手、作詞家、作曲家となる小椋を見出したあたり、並々ならぬセンスを感じさせる。

森和代は純一が回想する過ぎ去った夏の日に海岸で知り合った少女としてワンシーン登場するだけだが、そこはまるで夢見るように美しい場面だ。全体に白を基調とする映像は幻想的で、実に洗練されていた。

しかし物語全体を通してはっきり表面に出てくるのは、純一の甘ったれた心である。自力で生きる勝や堂々と己を押し通す伯父に比べ、彼の甘さは歴然だ。それを自覚し、恥じると同時に勝や伯父に対し後ろめたさを感じる。勝と話すとき、純一は自分を「おれ」と言ったり「ぼく」と言ったり、母親のことを「おふくろ」「ママ」と言葉を混用する。もちろん、後者が彼の日常語で前者は勝に合わせた言葉遣いだ。こんなところにも、勝に対する後ろめたさが表れている。

『赤頭巾ちゃん』の薫は、小林や由美といった自分と同じ境遇の友人の間にいた。いわばホームグラウンドにいるようなものだ。それに対して『初めての旅』の純一は全く違う生い立ちの勝とのコンビで薫が恐れを抱いていた「広い世間」というアウェーの場に出て

いかなければならない。ドキュメンタリーっぽかった『赤頭巾ちゃん』とは違い、ここでは世間の存在として二谷英明、宮口精二、春川ますみなど手練れのベテランが脇をがっちり固めている。

純一の後ろめたさは、大学受験まで2ヶ月足らずの高校3年生だったわたしも共有せざるを得ないものだった。勝のような同世代の友人はいなかったし、「広い世間」を体験もしていなかった。

『めぐりあい』の川崎の町に繰り上げられる工員と店員の恋だって自分には縁遠かったが、それでも青春物語であることで意識を共有できなくもない。それが、『男はつらいよ』（69 山田洋次）以来人気を集めていた『男はつらいよ』シリーズの義理人情あふれる世界となると、自分には生涯体験できないものに思え、作品を楽しむ一方で寂しい気持もあった。こんな豊かでもなくとも温かい濃密な人間関係に入っていくチャンスはない、と。

そんなわたしにとっても、『初めての旅』の結末は苦いものだった。最後に見せる勝のほほえみは、純一の心を抉るだけでなく、わたしの胸にも突き刺さったのである。

続く『二人だけの朝』（71 松森健 脚・長野洋）の主人公・啓介（岡田裕介）も、同様のタイプである。浪人のくせにカーレーサー目指して奔放な生活を送っている弟（三船史郎）とは対照的に穏健な性格で、大学での勉学に励んでいる。自分の作ったトレーラーハウスで旅をする夢を持ってはいるが、無理はせず着実に実現させていこうとしている。

学生運動をしている女子学生（中野良子）を好きになって恋人同士になり、弟と3人で彼女の実家である牧場まで旅をして、イランにある「不思議なミナレット」に行きたいという彼女の願いを叶える計画に没頭する。にもかかわらず、この恋は悲劇に終わってしまう。原因は啓介の思い切りの悪さだ。運動のリーダーと過去にあやまちを犯し妊娠してしまっていた彼女を、彼はすぐには許せない。それまでうんとやさしく接していたくせに、事実を知ってたじろぎ逃げ腰になる。それが彼女を傷つけ、結果的に爆弾事故死に遭わせてしまう。

■森和代の早すぎる引退

ところで『赤頭巾ちゃん』で岡田とともに脚光を浴びた森和代は、「キュートでちょっとこなまいきな女の子」（原作より）という由美のキャラクターにぴったりで、すぐに若者の注目を集めたのだが、なんと映画デビュー1年も経たない71年5月にディスクジョッキー、歌手の森本レオと20歳で電撃結婚し引退してしまう。当然ながら、森本に対して森和代ファンが沸かせた怒りは相当なものがあった。

代わって岡田の相手役に起用されたのが新人・中野良子である。この作品で映画デビューした後、NHKテレビの人気時代劇「天下御免」のヒロインに抜擢されて人気者となる。また、弟役の三船史郎は三船敏郎の長男で成城大学の現役学生。年齢は岡田より1年下で、現在は三船プロダクション社長をしている。業界二世という点で共通するところのある三

船は『赤頭巾ちゃん』の併映作『その人は女教師』（70 出目昌伸）で、岩下志麻の女教師と恋に落ちる高校生役を得てデビューしたが、『二人だけの朝』を最後に銀幕を去る。

翌年、その岩下志麻と岡田が共演したのが『その人は炎のように』（72 出目昌伸）だ。岩下演じる上流階級の有閑夫人が中心の話とはいえ、ドイツ語の家庭教師をするうち恋仲になる年下の青年は、やはり岡田が演じた他の若者たちと共通する面がある。貧乏学生でワルぶってイカサマ賭博に手を染めたりしているくせに、心やさしさを失っていない。いい金づると見込んで夫人に接近したつもりが本気になってしまい真から愛するようになる。ところが、それがかえって彼女の家庭を崩壊させ死に追いやる悲劇を呼ぶ。

■「死んではいけない！」という時代のテーゼ——『白鳥の歌なんか聞こえない』

やはり岡田裕介の良さが最も生きるのは薫役だった。『白鳥の歌なんか聞こえない』（72 渡辺邦彦 脚・桂千穂 原・庄司薫）は、引退した森和代に代わって、由美役公募による新人・本田みちこが相手を務める。『赤頭巾ちゃん』の1ヶ月後に当たる69年3月、由美は女子大への進学が決まり、小林（菅原一高）は駆け落ち騒動を起こす。そんな中でも薫は自分のペースをしっかりと守り大学へ行かずに学ぶ日々を始めようとしている。

今度彼の前に立ち上がるのは<死>だ。近所に住む一人の老人がこの世を去ろうとしている。老人は、とてつもなく豊かな学識を有し古今東西の教養を抱え込んだような人物だという。それだけに無常感とでもいったものが死を看取る者たちを襲う。どんな偉大な人物にも確実に死は訪れる。いくら勉強して知識を得ても死ねば全ては無に帰する、という虚しさだ。

由美の先輩である老人の孫娘・小沢さん（加賀まりこ）が、まずその虚無感に取り憑かれた。続いて由美が、小沢さんを通して同じ<死>の影にのしかかられ心細い気持を薫にぶつけてくる。そんな彼女たちと接していると薫まで動揺を覚え、ちっぽけな自分がいくら頑張っても<死>の前には無力ではないのかと思ってしまう。

だが彼は、その不安を小林ら自分と同じ状況にある友人との交流の中でエネルギーを充填することで克服し、<死>に怯えずやっていく自信を得る。小林は大恋愛をしたと大騒ぎして駆け落ち行に出るが、実際は彼の側の一方的な思い込みに過ぎず女性の方は全然その気ではなかったのだろう。一日も経たないで、眼の周りを真っ黒に腫らしてすごすご戻ってくる。みっともなく滑稽なこの愚行は、しかし、いかにも若々しい<生>のエネルギーに裏打ちされている。

二人結ばれることで<死>の影から逃れようとして「抱いて」と言う由美を、薫は懸命に遮る。「こんな死の影を恐れるような、逃げるような形ではいけないんだ」と心の裡で叫ぶ。性愛で<生>の充足感を得るのでなく、正面から立ち向かい己自身の前進するエネルギーで乗り越えていこうというのだ。

その意味で、死んではいけない！ どんなにみっともなくとも生きていきたい！ とい

うのはこの時代に青春を送る者にとってひとつの大きなテーゼだったと言ってもいいのではなかろうか。

70年に三島由紀夫が突如クーデターを図って自衛隊に決起を促し、失敗するや割腹自殺する。ノーベル文学賞候補と目され、われわれ高校生にははるか手の届かないほど偉大で高名な存在であるこの作家の壮烈な死は、極めて衝撃的だった。大人たちが戦後文化のある種の決算とでもいうニュアンスでこの事件を受け止めたようなのに対し、若者にとっては何より強烈に巨大な<死>として感じられた。

70年11月25日。高校3年のわたしたちは授業を抜け出して友人の下宿で麻雀の卓を囲んでいた。流しっぱなしにしていたラジオが、突如臨時ニュースを告げる。三島由紀夫が自衛隊に乱入した？ 何のため？ 本気でクーデター？ 麻雀をやる手は止めぬままだったが、皆、頭はそちらに向いていた。そして割腹自殺の報道が…。

いくらなんでも麻雀してる場合じゃない気がして学校に戻ると、結構な騒ぎになっていた。意味も十分わからないまま、わたしたちはその死の巨大さを感じていた。その3年前、中学3年のときに吉田茂元首相が亡くなり、戦後唯一の国葬が営まれ学校は午後から休みになるしテレビは特別追悼番組を流すし、という騒ぎがあったが、その死が若者に与えた衝撃は三島の方がはるかに大きかった。

文学少年気取りで小説など書いていたわたしにとって、名門に生まれ中学時代から時の有名文学者と交わり、16歳で既に小説「花ざかりの森」で注目され19歳のときに処女短編集「花ざかりの森」を出版、21歳で文壇デビューを果たし作家として認められた三島は偉大すぎるほど偉大に見えていた。海のものとも山のものともわからない無力な若者からすれば、強烈に眩しい存在である。

『白鳥の歌』の薫たちが大教養人である小沢老人の死に対して覚えた戸惑いよりも、わたしたちが三島の死に直面したときのそれは大きかった。自分たちと同年齢の頃から常に陽の当たる道を歩み文名隆盛をほしいままにした大小説家が、自ら命を絶ったのである。こちらはなんとか世の中に通用する人間になるために懸命に生きているというのに、馬鹿にされているような気さえた。

また、学生運動の中で大多数を占めていた一般学生が離れていくとともに運動はより過激な方向へ進み、セクト間の対立も激しくなって、いわゆる「内ゲバ」が殺人まで引き起こすに至る。成田三里塚への新東京国際空港建設をめぐる「成田闘争」も71年2月の強制代執行実施からいっそう激しさを増し、農民や学生の側にも警官の側にも多くの死者、負傷者が出た。そして72年2月には12名の死亡者を出した連合赤軍事件が明らかになる。

こういった具合に、若者の周囲には常に<死>の影があった。そんな中、性急に生き方の結論を求めずじっくり力を蓄えようという『赤頭巾ちゃん』二部作の薫のやり方は、この時代におけるひとつの有力な選択だった。大学に行くという方法をとらなくても自分なりに本当に学びたいことを追求していく。過激化した学生運動に加わっている同世代のよ

うに革命を目指して戦うのに比べれば遠回りかもしれないが、学んで自身の力量を蓄え、その力を使って将来皆のために頑張ろうとする。その姿勢にわたしは共感した。

そんな薫たちが重んじるのは、他者に対するやさしさである。武力でなく心やさしさを前面に出すことで、世の中を変えていこうとする。『赤頭巾ちゃん』の街で出会った幼い女の子への慈しみ、『白鳥の歌』での心弱くなっている由美への気遣いといった心やさしい感情がはっきりと伝わってきた。

■「したたかな」やさしさと「ひ弱な」やさしさ——『初めての旅』

やさしさを基調としているだけに、この二部作は語り口にも甘美なものがあった。『赤頭巾ちゃん』で薫の行ったパーティーで楽しそうに笑っていた美少女が突然はらはらと涙を流す不安定な心情の描き方とか、『白鳥の歌』で夜の闇の中にぼっかりと浮かんだ白木蓮とか、屋根裏のようになった由美の部屋から薫と彼女が夜の街の灯を眺めるところとか、印象深い部分が多々ある。

岡田裕介主演青春映画の最後は『初めての愛』（72 森谷司郎 脚・井手俊郎＋森谷司郎）である。北海道から横浜に出てきて働きながら予備校に通う悠一（岡田裕介）は、盛り場のクラブのママ夏子（加賀まりこ）という成熟した女の魅力の虜となり大学へ進学する意欲も失せて彼女の保護の下でなんとなく生きていた。

心配した友人の徹（志垣太郎）は、本来の悠一にふさわしい清純な娘・光代（島田陽子）を紹介し、二人が付き合うように仕向ける。狙い通り、二人は互いに惹かれ合う。悠一は、当初の目的を見失い年上の女性との関係に溺れてしまっていたものの、完全に自堕落なところまでは陥っておらず、まだ純粋なところを残していた。だから、光代と結ばれると本来の若々しさを取り戻す。彼らが徹とその恋人の4人海辺に遊ぶ姿は、明るさに満ち少しも屈託がない。

この映画でも『初めての旅』同様、小椋佳の叙情的な歌が絶えず流れ、端麗な映像によって全編が透明な美しさを感じさせる。TV「続・氷点」のヒロイン公募で一躍シンデレラガールになった島田陽子は、「氷点」で登場した先輩・内藤洋子の雰囲気を受け継いで可憐そのものだった。

しかしここでも、物語の甘美さとはうらはらに、主人公のひ弱さが露呈され悲劇に至る。光代の若さと素直さにはかなわないと思い知った夏子が自殺してしまうと、悠一は自らの心やさしさゆえに苦悩する。夏子のことを、あっさり忘却の彼方へ送り去ってしまうことができないのだ。動転した気持でハンドルを握り、高速道路を暴走して事故死してしまう。

『赤頭巾ちゃん』二部作では<死んではいけない>とのメッセージを強烈に出しながら、その他の作品では周囲の人間を死に追いやってしまう。薫が持つしたたかなやさしさと、他の場合でのひ弱なやさしさは、両刃の剣のような背中合わせの危うさを持っていたのかもしれない。

■内藤、酒井ラインの新ヒロイン・鳥居恵子——『初めての旅』

それでも、<生>への志向とやさしさは、岡田裕介主演作だけでなくこの時期の東宝青春映画の基調をなしていた。吉沢京子と同時期に内藤、酒井の流れを受け継ぐ女優として起用された鳥居恵子主演作にも、その色は表れている。鳥居は高校時代にスカウトされ、70年に高校を卒業すると同時に芸能界入りして東宝で公開された近代映画協会作品『裸の十九才』（70 新藤兼人）でデビューし、青春映画にも登場した。

『学園祭の夜 甘い経験』（70 堀川弘通 脚・奥山長春）は、黒澤明監督の一番弟子として知られベテランの域に入っていた堀川弘通監督が学園青春ものに挑んだという珍しい作品である。

優等生の牧子（鳥居恵子）は、学園祭の劇に出演したことから、不良扱いされている同級生の吉之（立花直樹）と話す機会を持つ。彼は、牧子と一緒に東大受験をめざしているボーイフレンドの忠男（内田喜郎）とはいろいろな意味で異なった個性を持っていた。ギターを弾き歌を口ずさむ吉之を見ていると、皆が言うような不良とは思えない。そればかりか、受験だけに気を取られている他の級友にはない心やさしさが感じられた。

無味乾燥な受験生生活に疑問を感じ始めていた牧子は、しだいに吉之に惹かれていく。学園祭最終日の夜の打ち上げで、お祭り気分になり皆でウィスキーを飲み、慣れない酒に酔った彼女はなりゆきで吉之と関係を持ってしまう。

異様なまでの開放感に支配された一夜が明けた途端、牧子は自分を取り戻した。単純に彼女への愛情に陶醉している吉之とは違い、軽はずみに初体験をしてしまったことへの不安に戸惑う。悪いことに、妊娠していた。激しく後悔するものの、もう遅い。その上、嫉妬した忠男がその事実を学校中に言いふらした。傷心の牧子は、唯一信頼できるクラスメートの謙（赤塚真人）にだけ告げて気持の整理をつけるための短い一人旅に出る。旅の途中では、デモに巻き込まれて留置場に入れられるなどしながら世間のさまざまな人々と出会った。

旅から帰った牧子は、改めて強く生きる決心をした。敢えて妊娠中絶をせず、子どもを産むことにする。そのために大学進学はやめる。ただ学校だけは退学せず卒業まで続け、独立して生活するだけの力を蓄える。吉之とは今後も付き合いが、結婚というような形で彼に従属する気はなく、あくまで自力でやっていこうとする。

高校生の妊娠というショッキングな話だが東宝生え抜きの練達の腕を持つ堀川監督だけに語り口はあくまで端正で、「清く正しく美しく」のトーンを逸脱していない。開巻のタイトルバックに映る高校生たちの姿から牧子と吉之が寄り添って林の中を歩いていくラストシーンまで、一貫して穏やかに格調を持って語られていく。

吉之は物質的には恵まれた環境にしながら親の愛情に飢え、その寂しさからガールフレンドたちとの性遊戯に耽っていた。しかし、どこか最後まで没入できないために乱脈な生

活に墮するには至らず、牧子と知り合うことにより素直な心を取り戻す。

忠男も、ただのガリ勉優等生とは違い、牧子に対する卑劣な行為を謙になじられ、殴られて深く恥じ自責の念に追い詰められる。自殺しようとするのだが、そのとき「死にたくない。ぼくだって、もっと生きていたい！」と悲痛な叫びを洩らす。この台詞には、本当は生きていたいのに死を選ぶしかない切なさがありありと感じられる。また、蘇生して牧子から許してもらいはするものの同時に別れを言い渡され、病室のベッドにもぐって泣く。ここでも、みじめで悔しい気持が率直に表れている。

この二人の少年は、岡田裕介の演じた若者とよく似ている。不良扱いと優等生という位置づけは対極にあるが、気持にどこか甘えがある点、心やさしい反面優柔不断である点は共通するものがある。

彼らと比べると、牧子に片思いしている謙にはひ弱さがない。学校では目立たぬ劣等生だが、家業の自動車整備の仕事をする姿は優等生たちよりもよほど逞しい。牧子に対し、「俺、(好かれるのは無理だと)諦めてんだ。でも一生友達でいてくれよね」と素直に告白する。彼女のことを一番親身に考えてくれているのは吉之でも忠男でもなく、他ならぬこの冴えない同級生なのである。

そして牧子は、吉之や忠男と違い強い心を持っている。妊娠という思ってもみなかった事態に直面して一旦はうろたえるが、自力で立ち直る。決して悲壮感にうちひしがれたりしない。十分な自信もなくせに安易に結婚を口にする吉之をやんわりたしなめ、未婚の母の道を選ぶ。「甘い経験」ならぬ「苦い経験」を生かして、自らの力にしようとする。彼女になら独力で生きることができるだろうと思わせるだけの説得力があった。

■同世代である以上、立場は違ってもわかり合えるはずだ——『制服の胸のここには』

鳥居恵子のもう1本の主演作『制服の胸のここには』(72 渡辺邦彦 脚・武末勝+渡辺邦彦 原・富島健夫)は、『学園祭の夜』よりも先に撮影されたにもかかわらず地味で興行的に難しいと判断され公開が2年間ほど遅れてしまうという不運に見舞われた作品だ。しかしこちらはさらに、いろんな生徒が混在している高校生活の雰囲気ヴィヴィッドに伝えた秀作だった。

小さな地方都市にある地元では名門とされる高校が舞台となる。京太(石川博)は、開業医の父と二人暮らしでのびのびと学園生活を謳歌している。文学を語り将来の夢を率直に披露する彼の相手は、同級生の芙佐子(鳥居恵子)だ。学校帰り、自転車を押して郊外の道を歩きながらいつまでも語り合う。一方で京太には、名うての不良・青木(沖田駿一)、剽軽者の花守(藤田漸)、受験勉強に励む優等生の高川(亀谷雅彦)など男同士の友人も多い。

試験の時困っている青木にカンニングさせてやった札に夜の街に連れ出されスナックで酒を振る舞われた京太は、女子高の不良少女・由紀子(鮎川いづみ)を紹介された。不良

への偏見などない彼は、彼女とすぐに親しくなる。だが由紀子の方は京太に恋心を抱き友人以上になりたい思いをぶつけてくる。彼には芙佐子がいるから気持を受け入れるわけにはいかない。

ところがある日、不良仲間絡まれている由紀子を救うためとっさに恋人役を演じた京太は彼女と接吻してみせた。噂でそれを知った芙佐子は京太を許さず絶交を言い渡す。その誤解を解く間もなく、さらに新事態が起きた。家の借金の犠牲になり、由紀子は土建屋の社長の二号になる羽目に陥る。高校生でいられる最後の夜、彼女は京太に抱いてと迫った。しかし芙佐子の存在が絶対である彼は応じるわけにいかず、さりとて見捨ててもできず、とうとう何もせぬまま一夜を明かした。

そうした京太の純粋さは自ずと芙佐子に通じ、仲直りした二人は再び強く心を結びつけ合うのだった。

……と、筋だけを紹介すれば何の変哲もない旧態依然とした映画にしか思えないかもしれない。ここには、センセーショナルな事件もなければ物語に激しい起伏もない。その代わりに、高校生たちの姿が鮮度たっぷりに描かれていたのである。描写のそこここで、実にいきいきと彼らの生態が描かれる。公開が遅れたためわたしがこの作品を観たのは大学1年の終わりだったが、もし完成時に公開されて高校時代に観ていたら、どんなに強く共感を覚えたことだろうか。

緑の樹々に囲まれた校舎からコーラスの歌声が流れ下校する生徒たちが坂道を下ってくる冒頭場面からして、さんざめく活気が伝わってきて快調だ。続いて学校帰りの京太と芙佐子が歩くところでは、二人の初々しさがこぼれんばかりに表れる。ふと芙佐子の横顔に見とれていた京太が角から飛び出してきた郵便配達自転車の驚いて我に返り、恥ずかしさをふっさるように急にダッシュして大きく飛び上がる。

次のシーンでは、河岸のススキ野原で朱に染まり始めた夕暮れ近い陽射しを浴びながら京太が将来の希望を語っている。少年らしい気負いに満ちた内容を楽しそうに聞いている芙佐子だが、彼が一段と気負った言葉を吐いた瞬間、「気障あ」とからかうように半畳を入れる。

この「きッざーあッ」という感じで発音される台詞のニュアンスが、実にすばらしい。好きな男の子が披露する夢いっぱいの抱負を頼もしい気持で聞いているものの、ちょっと気恥ずかしくなってさらっとからかってみたりする。そんな少女の心情が一言の中に鮮やかに表現されていた。

家に着いて自室に入った京太は、制帽を脱ぐと部屋の中に置いてあるデッサン用の石膏像の頭にひょいとかぶせる。そして引き出しから煙草を取り出して吸うのだが、その仕草が、いかにも吸い始めの頃であってたまに悪戯でやる程度といったふうだ。昔の煙草のパッケージは今のような箱形のものではなく、現在でもあるハイライトのように、銀紙で包まれたものを破って取り出す形式になっていた。

パッケージの上部中央に封紙がある。煙草を吸うのに慣れていれば、真ん中の封紙はそのままにどちらかの側の銀紙だけを破り、そこから1本ずつ取り出すところだ。それを京太はバリッと封紙も銀紙も全部破ってしまう。細やかな描写だ。

こうした行動様式や気質は、現在の高校生からすればはるか昔のものにしか見えないだろう。当然だ。彼らの祖父母の世代の高校生活なのだから。しかし、われわれその時代を体験した者からすると、当時の高校のたたずまい、高校生の心理と感情がありありと甦ってくるだろう。1970年前後の高校生はそうした日々を送っていたのである。煙草を吸うのは多くの男子高校生にとって通過儀礼のようなものだった。

細部をそのような形で描かれる少年少女たちは、まぎれもなくその時代の気分を背負っていた。皆それぞれに立場や生き方を異にはしていても、互いを認め合うことができる。たとえ正反対の立場にあらうと決して相手を頭ごなしに否定したりはしない。

全く普通の高校生である芙佐子と不良少女で学校を辞めて二号になる由紀子とは表面上ではたいへんな懸隔がある。そのうえ、二人は京太をめぐる恋のライバルでもある。だが、彼女たちは互いの生き方を尊重し合える。芙佐子は由紀子を思いやることができるし、由紀子は京太の心を捉えている芙佐子に一目置いている。＜同世代である以上、立場は違っていてもわかり合えるはずだ＞というのは、＜死んではいけない、どんなにみっともなくとも生きるべきだ＞と並ぶ、この時代の若者に共通するテーゼだったと言えよう。

優等生も不良もガリ勉も、自分に忠実にせいっぱいやるという思想においては共通項を持ち得るのである。その共通項を頼りに、彼らは互いを認め合える。

このように高校の数も進学者も少なかった頃は、地域にある学校に多様な生徒が集まった。それがこの後70年代に入ると高校進学率が上昇しほぼ全入に近くなっていく中で、高校の数も増え、偏差値による輪切り進路指導などにより高校の階層分化が急激に進む。同程度の学力、進路志向を持った生徒ばかりが集められ、生徒間の個性の違いが薄れていってしまう。

まだ多様な仲間と接して多様な体験をすることで、自分の論理だけに凝り固まらず己を見直すチャンスを得る場合もある。京太は、心やさしさゆえに由紀子と付き合う。偽りの接吻もする。しかし、その中に由紀子への好意以上の感情やヒロイックな行動に自己満足する部分がなかったかどうか。芙佐子から厳しく咎められて彼は自分を省み、やさしさの美名に酔っていた面のあるのを自覚する。そのことを恥じ率直に反省したからこそ、芙佐子の許しを得たのだし、由紀子の心を傷つけもせずに済んだのである。

■30代半ばの若手監督が支えた東宝青春映画

この『制服の…』、先に紹介した『白鳥の歌』は、いずれも渡辺邦彦監督の作品であり、公開が遅れた『制服の…』が実質上のデビュー作になる。大ヒット作となった『明治天皇と日露大戦争』(57 渡辺邦男)などで知られる商業映画の巨匠・渡辺邦男の長男で、56年

東宝入社。55 年入社の恩地日出夫、森谷司郎、同期入社の浅野正雄、57 年入社の出目昌伸に続いて東宝青春映画を担った。

『制服の…』と『白鳥の歌』の間に撮った第 2 作『恋人って呼ばせて』（71 渡辺邦彦）も好感の持てる佳作である。音楽大学を受験するため上京した少女の「東京滞在日記」のような物語だ。兄のアパートに転がり込んだ少女（吉沢京子）が、受験には失敗するものの滞在中に多くの友達を作る。なかでも芝居に打ち込んでいる劇団研究生のボーイフレンド（石川博）ができ、彼との再会を約して充実した気持で田舎へ帰ることができる。東宝では必ずしも成功しなかった吉沢京子が主演だが、すがすがしさの残る小品だった。

内藤洋子、酒井和歌子から吉沢京子、岡田裕介、鳥居恵子らへの東宝青春映画の流れは、先述のように恩地日出夫、森谷司郎、出目昌伸、浅野正雄、渡辺邦彦の順でデビューしてきた三十代半ばの若手監督たちによって支えられた。『若大将』シリーズまでの娯楽の王道を目指す路線から若者たちの等身大の青春を描く方向へ進み一時代を画した意義は大きい。

だが、71 年の大映倒産、日活のロマンポルノへの政策方針転換など日本映画各社の経営状況が厳しさを増す中、東宝も 72 年に自社製作を中止し、分社化したり提携したりしたいくつかの製作会社へと製作部門を切り離して外部からの買い取りや委託引き受け作品の配給に重点を移し、全国に張り巡らした強力な興行システムの温存に奔走する。結果、東宝映画というブランドは徐々に消滅していき、同時に東宝青春映画の命脈も尽きていく。

支えてきた監督たちも、森谷は『日本沈没』73 の大ヒットを機に『八甲田山』77、『動乱』80 などスペクタクル大作の監督として活躍するようになり、他の 4 人はテレビに活動の中心を移していく。次に東宝系の映画館に若い観客が詰めかけるのは、山口百恵、三浦友和コンビの出現を待たねばならなかった。